

恰かも一日の如く、温顔以て導き嚴俊以て訓誨し給ひしかば、生徒の先生を視ること父母の如くありき殊に青木佐藤の二先生は、久しく舎監の繁務に軼掌し給ひ、専ら校風矯正、舍風振起に力を盡くし給ひぬ、然るに今や此の親愛畏敬する三先生を失ふに至れり、爰に宴を張り聊か微意のある所を表せんと言ふ會場は生徒控所あるが、其の裝飾は實に委員の意匠を凝らせしものにして其の美、其の齊宛然として之れ貴顯紳士の夜會場、先生を始め會員一同席に就くや、委員の一人生徒總代として、沈痛ある語調をもて、先生との離別を悲しみ且つ微衷を陳すれば、先生も又席を起ちて懇切ある教訓を給ひぬ、こゝに和氣藹々場に滿ち暫くは離別の悲みも忘れて笑ひ、且つ語りしが漸く夜の更くるを以て先生は都合あればとて退場し給ひしかば、數百の會員は只悄悄として愛別の情に堪へざるが如し、折しも城山の鐘のさびしく十一時を告げしにぞ、會員はこゝに閉會することありぬ、

生の本校の爲めに大に盡碎せられんことを深く希望するものあり

◎新艇成る 眼前に蕩漾たる琵琶の水を抱き、夙に水との親密からざる我水上運動の、いかでかの老朽艇を以て、新進他校の水上の競争裡に對するを得んや、

即ちこゝに水上部は數百金を募り、艇体は第三高等學校嶽水會のボートに倣ひ、大津市北川造船匠に托して、新に三艘のボートを作らしむ、船体堅牢にして、十余年の持續を保證せしめ、ペンキは六回の複塗をおし、「足掛ケ」「クラツチ」は共に新式、堅固を旨とし、「オール」はメリケン松と俗稱せるものにして、軽く、強く、現今嶽水會のボートを除いては關西二十余州、到底其比を見ざるべしといふ、六月九日、艇は蒸氣船に伴はれて、當波止場に着せり、不日進水式を兼ねて、ボートレースを行ふことに決しぬ、新艇成る、新艇成る、以て練るべし、以て鍛ふべし、湖水激々たる波を濤へて。吾人を待つ

◎本校生と本縣商業學校生徒との劍道仕合 我々に劍柔兩道を置かれてより以來こゝに十數月余、先生の熱誠ある指南と、生徒の熱心ある鍛錬とは、この短日月にも關らず、技に於て、神に於て、長足の進歩をみせしは實に五月十八日商業學校との劍道仕合に於て見るを得べし、商業學校は久しく此の技に於ては驍名あるものあれば、勝算思策を思ひしが、始めの程は山本、廣崎、西村、中野、の四氏武運拙くして打れしも最後に出らし我々の勇將、門根米次郎氏は奮闘數番、見事敵の魁首三人まで續け打ちに打ちつけぬ此に全勝は全く吾等が手に歸しぬ、あゝ何たる快事ぞや、奮へ四百の健兒膽せしに、六月二日平川常太先生其の後任として來られたり、吾人は先生の博學あるを聞き必ず貢獻の多きことを信じて疑はざるあり

◎大川、山内兩先生、 六月二日英語及數學擔任の教諭心得として來任せられたり、吾人は兩先

こと切あり、行け、此堅牢たる艇の破れんまで以て覇たるべく、これ期して知るべし。

◎演說討論大會

炎天燦日の候、ベースボール熾に、ボート艇庫に人繁く、我會員の面色恰も銅の如く、体軀は黒金にさも似たり、いでや我黒兒の舌、僅に三寸、いかに壯大の抱負を吐くか、いかに高尚ある理想を貯へたるか、いかに懸河の雄辯を練り上げ得たるかを試みんと欲し、日は六月廿一日、時正に午後一時半、講堂に於て此大會を舉げられたり、何人ぞ今日油揚げの膳に飽きたりといふは、乞ふ速に其雄辯を耳にせしめよ。

開會之辭

部長 奥田 先生

白顔長幹の士、いさも肅然として、徐に、例によりて本日此大會を開いたから、大に諸子の雄辯を試みるがよい、が併し一言大に注意して置くことがある、言語の自由あるは元よりであるが、もしこれを誤解して學生さうふ身分及其本務を失はれては宜しくないから……

※ ※ ※ ※ ※

泰然として壇に登るものあり、先づ一杯の湯を飲干す。

第一席

門根 米治郎

諸君は江洲人といふことを解せるか、江洲人は一種輕侮的の語あり、江洲人は一の輕侮を以て目せらる、しかし予はこれを排することが出来ない、即ちそれだけの欠点があるからで、予は残念でからない、乞ふ諸君奮ひ玉へや……

とこの外二三、校内の氣風に付て所感を述べたり、氣慨言語の外に溢る、然れども辨説少しく、早や過ぎたるの感あり、乞ふ練磨怠る勿れ。

會長一小冊子を手にして徐に壇に登られたり、滿場寂として聲あし、

第二席 前赤壁賦朗讀

市瀬 先生

一聲高く、一音低し、或は長く或は短に、強き聲柔き聲ある調、「蘇子愀然」……は聲いよ／＼低く長し、「即ち物は吾と盡くるなきなり」聲ますます高く長し、結尾流暢なる音調にして余音囀々の感あり。

壇上に現はれ輕快ある風采の一士、滿場眼を鳩む。

第三席 毀譽と文學

清水 省三

人生に毀譽といふものは必ず伴ふものなること何人も知つてを

ア、チブス、腸加荅兒、インフルエンザ、コレラ等菌の子豫防の欠くべからざるを説き玉ふ、滑稽と理論を交へて、よく了解せしめられり、

拍手の音、鳴り絶えぬに、小辨士起ちて壇上に一咳せり。

第五席 快樂の基礎は健康と在り

宮野 專太郎

黃嘴を一少辨士、其膽や嘉すに足れり、曰く、

三井や岩崎の金持ちにあるのも快は快だ、併し身体が弱くあつたならば何も快とするに足らない、乞ふ今日の小年學生は、先づ散步旅行を奨勵せかいけい、それから勉むべき時に勉むべしである

と言ふこと、大人ぶりたり、

代りて壇に起てる人、これあん、

第六席

森脇 先生

にてありける、英文の「リーディング」は語の上下、發育法の正確を要すと、數言の前置詞をおいて、アントニーが「シーザア」の横死を吊ひ、「フルタス」の罪を訴ふるの文を朗讀せらる、語調眞に迫まる。

るが、大体毀譽といふことは、何所までも公明正大でなくてはならぬ、で文學といふものは決して腐敗して居るものでない、戀を以て文學のみ思ふてはならないものである、然るに今日の人の最も誤解してゐるのは此二者である、もし尙誤見抱けるものあらば、かの琵琶湖の清い水で其頭を一洗してくるむよい。

能辨にして、輕快ある態度、尙聲音の低ふして、抑揚少あきを憾とす勉旃。

二個の試験管を手にし、て登壇せられしを

第四席

平瀬 先生

こそ、冒頭大喝一聲。

蒺藜の種子は生れぬ、瓜の蔓には蒺藜が生れぬ、凡て生物の生ずる前には、胎生、卵生、濕生、化生、とであるが、化生といへば丁度かの謬にいへる、山芋が鰻に化る、ミウ又雀が蛤になる、といふ様のもので、大体生物の始にはいろいろの事があつて、瓜の蔓に蒺藜が生れぬといつても、「ケラミ」いふ虫の腹から芽が出で、蓬にあるといふ様ふ事もある、が併し生物學上蒺藜の種子は蒺藜のものである、米粒が蛆が化つたといつても、これは一匹の蠅の作用なのである、凡てこんなもので、チャルス、ダウソンは大學者で斯道の有名な人だが、皆實驗といふことをしたからで、隨つて發見といふことをする、いふんな謬なこともあるが、これを妄信しては宜しくない、自ら實驗、發明して、世の迷ひを解かふければならない。

と此他、「蒺藜の種子」をとして、チブテリヤ、マラリ

第七席

石田 孝三

聲調素的に高し、朗讀す「山行」の一文

第八席

杉浦 先生

本日は四時間の授業の爲に聲が潤れたとの前置きを以て「前出師表」を朗讀せらる、聲朗々、盤上球を轉ばそが如く、又悲壯。

續いたり又朗讀

第九席

柴田 善作

「汝自ら爲すべし」の英文を朗讀せり、半分は暗誦、發音法、アクセントの正しからぬを憾む。

又々朗讀

第十席

野村 義雄

李愿を盤谷に送る序を朗讀せり、中々よく讀みあしたり、聲次第に低くありしは憾あり。

第十一席

中村 祐寛

スキントン、サアドリーダーの一章を讀む、一寸通

辨人を氣取りたるさま、笑ふさま、笑ふ人あり、賞むる人あり、朗讀には失点あり。

第十二席

廣瀬 淵龍

「中川作平君の代りにやります、聴くも聴かんも諸君の御勝手、一風變はりし前置口上、さて勢鋭く叫びて曰く、正義は鐵石をも、ダイヤモンドでも透すもので、これは即ち天命令ふのである、正義には第二に決斷力が必要である、それから分別力(?)が要るこの二つがあれば正義も駄目だ、行へるものでない、諸君は此二者を心して正義に進まなければならぬ、と、此男我校の雄辨者の一人、そりかへり、大きな胸を張りて、演ぜしもの、それかくの如し、喝采の聲、場を振はせり。

喝采の聲裡に埋もれて、徐に湯をコップに注げる男あり、壇上に默然として立てり、これを

第十三席

賀來 俊一

とあす、

鎌倉時代の文學は多く僧侶の手にありて、戦亂打續きて血醒き當世であつたから、實に文學は暗黒の裡にあつて僅に僧侶の爲に其命脈持を續して來たのでござります、で私に其時代、文學の……

ます、どうぞ其邊は……

と言ひ終りて「黃海々戰記」を朗讀せり、節面白く又可愛らしく、首を傾け讀み了る、「勇ましかった〜」の聲、隅の方より起れり。

第十七席

高岡 憲治

「細川幽齋勅命によりて田部城を去る」の文を讀む、聲朗に、よく讀みあせり、唯々中途聲枯れて中絶せしを遺憾とあす、場の一隅に「低い聲でやるべし〜」とは何人の語かりしか。

第十八席

橋本 先生

肥後熊本貧兒寮の創設者友林虎五郎の性行を朗讀せらる、涙零々、何等の義士、何等の義舉、聴く者、先生の朗讀に依りて、其性行の義烈に感佩措く克はざらしむ、嗚呼虎五郎氏の義烈は、先生の朗々たるリーディングの爲に、吾人は泣きたり、泣くことを得たり。

第十九席

大日方校醫

當今コレラ、ペストの流行蔓延に就きて、循々とし

と澄まし込んだる、口上數言、當時代の流行ありし謠曲「鉢の木」を讀みにかゝれり、表紙には國文評釋の文字ありき、時頼の語、常世の言、妻の物語、及び文章、朗々抑へつ、揚げつ、或は低く、又は高く、一調一調、いよ〜おもしろし、「候ふ」の語、又おもしろく、一きは昔を忍ぶの思ひあらしむ、後段、文の結尾に至りて壯快、昂然たらしむ、いとおもしろし。よくも聲のつゞきしことよ。

第十四席

吉居 留松

すまし込みて「伯夷頌」の文を朗讀す、よろしかりき。

第十五席

坂上 勝

ナショナルリーダーの一章を讀む、上出來〜、況んや、初年級の人あるに於けるをや。

これは當日辨士中の、最小者、

第十六席

北村 敬三

拍手の裡に迎へられ、前置に曰く

私は下手であります、勇ましいても、勇ましくないやうに聞け

て此原因、歴史、豫防法を説かる〜こと懇切臻れり況んや其布達、縣令を引證して、注意の細密ある、吾人實に感謝に堪えざるあり、終りに曰ひ給はく、かの「夜ひる」といふことは實に恐ろしい事で、五月雨頃、空氣の溫めし勝な時は尙更の事、腹を冷やすのは最よくない、で皆様は注意しなければ、いけません、

又ボートレースの後で脚氣、肋膜炎などをやる人が澤山ありますが、一体皆様は運動の爲として、ボート、ベイスボール、をやるのは宜しいが、併して、この爲に病氣を患起すといふことはこりや決して勉強の本旨ではありませんでしよう、皆様これから後に望のある方々、子、實にこれは注意して貰はねばなりませんぞ、

と生等感佩、肝に銘す、先生悠々として降壇せらる。

第二十席

新井 先生

美髯の人、悠然として壇に立ち給ふ、先生あり、太平記の「先帝崩御の事」を朗讀せらる、先生風に美聲高音、朗讀の絶妙あるを以て有名あり、誰か其妙調に接せんことを樂しまざるものぞ、夫れ榮とせざるものぞ、場肅然。

其裡に聲あり、朗かにひゞき渡れり、低きところは、

牙え渡れり、高きところは澄み渡れり、而かも悲哀而かも亦凜々として、遠寺の暮鐘を耳にするが如く吹雪の音を更夜窓外に聴くが如く、玉散る秋水に血塗みれたるものを眼にせるの感あり、十一月の霜の白きに楓の色づきたるを見るがごとし、南北朝の昔髣髴として、聲と共に眼前に描映するが如く、場裡頭數百、絶えて仰ま見るものあり、ますく讀み來りて、ますく絶妙、「葬りたてまつる」に到りて、腕を扼せざるものあかりき、漸く讀み終りて壇を降り給へば、満場の人、再び愁眉を開きて、蘇生せるの感あり。時宛も午後五時十分、日暉色紅にして、講堂の西窓を射る。

◎柔劍兩道大會

昨秋我が校劍柔兩道の設けられしより、四百の健兒、日々其練習に怠あかりしが、茲に六月二十九日曜日を卜して、劍柔兩道大會は開かれし、此日は前日の降雨漸く晴れて軒端には囀の雀の聲喧しき程ありき、生徒扣所を以て、演武場とあし、劍道は午前、

柔道は午後舉行せられたり、今左に其概略を記さん時鐘午前八時を報するや、坂、吉井の兩先生の審判の下に本日の大會は始まりぬ。

今此内にて觀客の目を惹きし分を記さんに西川―柴田、今迄の仕合とはことかはり、これよりは斯道に於て、我校屈指の驍將達の仕合あれば、見る人も手に汗を握りていと面白し、髣髴太短きは西川とあん申し、丈高く細きは柴田にて、「御小手一本」と叫びし聲も高く細く響きぬ、互に御小手一本を受けしが、間もなく、呼ばる聲もいと高く柴田は御面一刀參らせぬ、

西村―川南、流石西村は老練の士、小手と面とをいと鮮かに參らせたり、吾人は寧ろ川南が御突一本を加へしこそ、殊勝に思はれたれ、中川―中野、何れも五尺五寸餘りの大の男、二人揃の白袴にヤオラと身を立てゝ氣取りしスタイルの面白さ、やがて叫びの聲も怖ろしき計りに、よく戦ひしが、遂に中野は御胴一本と御小手を入れて、めで

たく勝ちぬ、

大東―西村、二人ともに、音に名高き斯道の勇將、さすがによく戦ひ、よく防ぎしが、大東先づ「御小手一本」の聲も高らかに一刀を加へ、續いて御面を參らせたり、川南を討ち破りし西村にして、一刀をも入れ得ざりしは、いかゞの都合にや、

室谷―東郷、室谷はこれ以前より其名も高き斯道の老練家、されど近頃の技術は如何あらん、東郷はこれ新進の勇士にして、劍界に於ても熱心家の名高し其技は如何にと觀る人もいこ心してき、やがて相向ひて戦ふに、所謂電光石火とは此事にやあらん、忽ち東郷は「御突ッ」と調子高き叫び聲をあしぬ、戦は益々急にして、愈々興あり、やがて室谷は其隙を窺ひ、肝高き聲を出して御小手二刀を參らせ、遂に勝を制しぬ、

廣瀬―山本、廣瀬は例の引込姿にて始終控へしが、山本は胴一本小手一本とを廣瀬に加へぬ、廣瀬は山本の敵にはあらざるやに見受られたり、

松井―近藤、松井の沈着ある身振り、近藤の少々氣取りたるスタイル、いづれも花々しく、互に日頃鍛へしこの腕を目にももの見せて呉れんと、間斷なく睨み合ひしが、やがて怖ろしき掛聲を出して戦ひ初めぬ、「御胴一本」と近藤は得たり顔して叫びぬ、されど松井には敵し難かりけん、御胴一本に復讐せられ、尋で御小手一本入れられて引き退きける、

高橋―山本、戦へば勝ち、攻むれば取り、曾て負くる事を知らぬ、山本には、如何に荒武者の高橋も叶はざりけん、すは戦ひ初まりぬと思ふ瞬間、山本は二刀の小手を入れて勇ましく勝を制しぬ、

門根―高橋、西村、山本、これはこの今日第一の面白き仕合にて、門根の御大將一人して高橋、西村、山本の三驍將を引く受くることあれば、觀る人もこれこそと思ひて手に汗して待ち居たりける、そも門根の御大將と申すは、見るも怖ろしげある容貌魁偉の剛將にて、門根としいへば、吾人をして劍道を連想せしむる程の勇者にして、我校は更あり、揚武

館にても第一流の剛のもの、今日の勝負は如何と待ち居るうちに、やがて顯れ出でたるは此御大將にてありき、先づ相向ひて立ちたるは、これも音に名高き高橋の荒武者、暫は互に睨み合ひしが、忽ち伏せる虎をも驚かさばかりの掛け聲を出して高橋の御面を討ちぬ、其勢電光もたゞあらず、西村代りて防ぎ戦ふ程もかく「御小手一本」の一聲の下に討ち殺されぬ、其技や實に敏且つ精にして名狀すべくもあらず、次に顯はれたるは山本とて今日の數多の戦に、一度も敗を取りし事なき吾校屈指の剛のもの、されど門根に取りては何かあらん、暫し戦ふ程もかく御面一本に參らされたり、尋で出でたる高橋、此度は如何にしても、新しき勇氣を奮ひ立て、いと勇ましく戦ひしが、又もや「御胴一本」の一聲に果敢なく討死し、西村代て戦ひしも其甲斐あくて御面一本入れられて打ち退きぬ、次に顯れたるは山本にて、此度こそは門根の眞甲二つにせんものをと勇み立ち居たる、折しも引き續きての激戦に、如何に剛勇の門

も無き程の血氣盛りの若武者、されど門根も亦さる者にて、前にもいへるが如く、我校にては唯一の斯道の名人、何れも天晴の達人、コリヤ見物ぞと、満場の觀客何れも腕を扼して力味居れり、やがて意氣揚々、場に顯れたる二人の大男、互に睨み合ひて怒々迫らず、其スタイルの雄々しき譬ふるにものかし、忽ち響く門根の掛け聲、潜める龍をも驚かさんばかりあり、打ち込む鋒先電光の如く、互に雌雄を争ひしが、さききに練習積みたる斯道の老将あれば、勝敗容易に決すべくも見えざりしが、やがて門根は「御面一本」の下に本田氏を打ち破りぬ、討たれたる本田氏、意氣尚沈まず、よく戦ひし甲斐ありて御小手一刀を入れぬ、されど門根の技には敵し難かりしか又もや御胴一本を制せられて、勝は遂に門根に歸しぬ、あゝ門根の得意察すべきあり、茲に十一時三十分、劍道の仕合を終り、賞品は夫れ／＼優勝者に授與せられたり、午後一時といふに山上先生の審判の下に柔道の仕合

根も漸く弱り出でんとするに乘じ、力戦火花を散らすこと數分、寸隙を窮ひて遂に連戦連勝の門根の大將に、御小手一本を入れ得たり、山本の得意蓋し思ふべし、されど門根の名譽も亦大あるかあ、揃も揃ひたる三人の驍將を二度まで打ち破つたる其手際は此人を措て將た誰にか埃たん、玉木先生―池田先生、これより先生方の仕合とありぬ、兩先生とも斯道にはかねて嗜みありしにや、互によく戦はれたりしが、終に玉木先生の勝に歸しぬ、小出先生―杉浦先生、意氣共に盛あり、先づ小出先生の御突に杉浦先生參られ、間もかく調子高き「御胴」の一聲の下に終に小出先生の勝に歸す、平瀬先生―玉木先生、先に池田先生を破りて意氣揚りたる玉木先生も、平瀬先生の老練には敵し難かりけん、互に戦はるゝ程もかく「御面」續て「御突」の二刀に玉木先生の敗、是非も無し、本田―門根、本田氏は揚武館第一流の剛の者、容貌魁偉にして疾くに斯道の達人として其名を知らぬ者

は初められぬ、觀客は午前の如く場の東方には塔の如くに集り來ぬ、就中面白かりしは、上坂―玉樹、上坂は少々講道館流の嗜みありとか聞き居りしが、玉樹は何の恐るゝことかあると言はぬばかりの顔附にて、山上先生より授けられたる不動流にてよく技を戦はせしが元來腕力強かりし爲め、遂に不動流の玉樹勝を制しぬ、大東―西川、大東は江戸育ちの若武者、西川はよくもこれほど肥えたるものじやと覺ゆる程の太男、互によく戦ひしかば、これは面白しと見るうちに、大東脚部に負傷せし爲め、分とはかりぬ、大曾根―淺見、兩者何れも揚武館の初段にて、斯道の達人として其名隠れあかりしが、觀客の多くは大曾根の勝を豫想せしに、計らざりき淺見の爲めにいたく參らされんとは、これ全く大曾根は、近頃練習を怠り、之に反して淺見は日々練習に怠らざりしに由るあるべし、さても油斷は恐ろしきものかあ、山本―寺前、何れも亦揚武館の初段にて、我校にて

は五級のばり／＼あり、いづれ劣らぬ武者振りかれば、起き上りては飛びかかり、烈しく戦ふ程に、互にかんぬきの手にて参りつ参られつ、よく力めしが遂に分とありき、

西村―中野、西村氏は揚武館の驍將にて、中野も亦我校にて老練の聞え高き猛將あれば、投げつ投げられつ、一舉一動いと威勢強く争ひしも、遂に西村氏は中野のあげすてにいたく参りたり、

本多―今津、二氏ともに揚武館にて毎夜／＼山上先生の教を受けて練習せられしだけありて、非常に元氣強く互に技を較せられしが、遂に本多氏の勝とありぬ、

高橋―松井、柔剣兩道の達人として其名も高き二人の荒武者は茲に柔道の仕合せらるゝこととありぬ、何れ劣らぬ腕あみの様見受けられたれども、松井は臂力人に勝れたる高橋には叶はざりけん、遂に参りたりき、

門根―大橋、門根は前にもいへるが如く、劍柔二道

りて此道の達人として並ぶべき猛將をば打ち伏せんことは叶はざりけん、遂に草木の風に靡くが如くに、皆もろともに参りぬ、

これにて仕合は終り

次は門根氏受方とあり不動流の形數番を演ぜられたり、今其の形を列舉すれば、兩手振、車返、片輪車、絹被、兜返の五種にして、斯道の老練家殊に形には其名を得たる山本、淺見、大東の三士にして、ヤツト掴めば一寸の隙あき不動流の形、況して撰りに撰りたる形の見事さ、満座蕭然として其技の巧妙に感じ合へり。

夫より運動場に出で、源平瓦割の舉二回あり、さすがに廣き運動場もかは狭しと言はぬばかりに駆け廻り、其勢人をして凄然たらしむ、これには小出先生池田先生を始め其他の諸先生にも、或は大將とありて部下を指揮せられ、或はたゞの一兵卒とありて奮闘せられしもありて實に愉快ありき、吾人はかく先生方の諸種の運動遊戲に吾人を導かれんことを切望

に於ては我校はおろか揚武館の連中に於ても、敵を求め得ぬ程の剛の男にて、其魁偉ある体格は人をして欽羨の念をいだかしむ、さりながら大橋と申すは、一里の路をも遠しとせず、毎夜／＼に揚武館に通ひて練習せられし剛將あれば、今日の仕合は如何あらんと、見る者さへ手に汗する程ありき、やがて仕合の初まるや、さすがに練習の功を積まれたる甲斐ありて其勢は双龍の天に冲るるが如く、隠見出沒極りなく、觀客たゞ恍然と氣を奪はれ、暫しは開きたる口も塞がらざりし程あり、七轉八倒秋風の葛の葉を翻へすが如く、苦戰奮闘稍々久しかりしが、遂に大橋氏は門根氏得意のかんぬきに空しくうせにける門根の意氣揚々たるに反して、大橋氏は遺恨万丈、門根―淺見、成瀬、宮村、大東、青木、これはいと面白き一場の餘興にて、門根の大將一人に五人の若武者寄てかかり、或は右より或は左より、前より後より攻めかかりし様は恰も餓えたる小犬が餌を争ふにさも似たり、五人の若武者達もよく戦ひしが、さ

してやまざるあり、

夫より休憩場に於て茶話會を開かれ、今日の仕合の話など語りて各々歡を盡して散會せられしは城山の鐘聲六時を報する頃ありき、

◎水上運動大會 第十五回本校創紀念日（五月一日）に行はるべき水上運動大會は新艇の成るを待つて六月十六日を以て大洞内湖に催されたり。その狀況は小品漫錄欄を参照すべし。

◎河村喜一郎君天す 君や年少氣鋭の才人、近くは本誌上君の彩筆に接せしこと一再ならず、皆深く君の前途に望を属せしが天はこの年若き才人を永くこの土に活かしむるを欲せざりけん二豎のため七月下旬縁かず草野をかざる葉末の露と共に、常とはに其姿を地上に消して白玉樓中の人とありぬ。悲しい哉

◎奥田先生を送る 吾人曩に坂田先生の悲報に接し、至悲斷腸の淵に沈みし折りから、續いて奥田先生の去らるゝに逢ふ、嗚呼凶神何ぞ吾人を苦し

ましむるの多きや、嗚呼亂離の慘、分袖の悲、吾人述ぶるに由あくして、唯だ嘯嘯痛嘆するのみ、されど又如何ともする能はず、たゞ吾人は益先生の健在せられむ事を祈ると共に、深く先生の御恩に對し、深き感謝の意を捧ぐるにあん。(八月二十三日)

◎山内先生を送る 吾人曩に、山内先生を迎へ此の良先生を得たるを喜び、益々本校數學科の進歩を期し、相共に祝せしに、計らざりき、今日先生の我が校を去れんとは、吾等憾あきを得ず、されど天運の定する所、如何ともあし難し、嗚呼吾等又何をか云はん、たゞ先生の健康を祈ると共に、深く先生の恩を謝するにあん(八月三十日)

◎第二學期始業式 九月十一日、例によりて第二學期開校の典を本校講堂に於て舉げらる、午前九時、號砲を以て職員生徒一同臨場するや、先づ敬禮をかし、終つて君が代を三唱し、次で矢板視官官勅語を奉讀せられ、後、始業の辭を述べらる、かくて後一同再び君が代を三唱して全く式を終り散會せり

は大に歡迎し謹んで其の指導に浴せんことを誓ふと共に、先生の其の職の爲めに大に奮發あらを事を希望するものあり、

◎川口先生を送る 先生は教諭心得として數學を擔當せられしが俄然十月三日職を辭せられたり顧みれば一昨三十三年六月赴任せられしより爰に三星霜、其の間生等を導くや丁寧懇切、醇々として倦まず、吾人は深く良先生を得たるを喜び長く其の恩に浴せんと思ひしに端あく訣別の止むあきに至りぬ先生は又含盞として其の功績甚だ多しと云ふ、會者定離は世のあらひとは云へいと悲しきことにこそ、吾人は此の期に臨みて又何をか云はん、たゞ先生の益健全あらんことを祈るのみ、

◎陸上運動秋季野球大會 城山の翠綠漸くあせ行かむとる時、我が運動場裏、ストライキ！アウト！の叫聲、端あくも吾人が耳底に響き來りぬこれあむ我陸上運動部秋季野球大會の催にぞありける。日頃の手あみ、ごらうじ召せとて、ことし拾三

◎廣田先生 市尾先生の後任として明治三十三年の十二月に來任せられたりき、先生久しく軍籍にありて嚴峻ある規律の下に起臥し給ひしかば、本校に教鞭を取られてよりと常に規律の紊亂を悲み、専ら此れが振興に盡釋し給ひしが、九月十二日、終に先生は岡山縣中學校に轉任し給ふことありぬ。

◎小川先生 先生は越後の人、大學に學びて史學を研究し給ひしが、茲に九月二十三日、廣田先生の後任として、職を本校に奉じ給ふことありぬ、今此良先生の榮任を得て、深く此科を學ぶを得るは實に吾人の幸福と云ふべし、

◎水野先生 師は篠山中學に教鞭を採られしが玉木先生の後生として、十二月二日日本校に赴任せられたり、吾人此の經驗深き良先生も迎ふるを喜ぶと共に規律的に嚴肅に吾人を教導せられんこと希望するあり

◎堀先生 十月二日森脇先生の補缺として來任せられたり、先生は素養甚だ深く經驗も多しと、吾人幼陣の若武者、さては三十餘度の大合戦に敵を仆すこと三百餘騎(チト嘘言かも知れぬ)の古武者までが、小手あらぬミットをしつかどめて待ちに待ける日はげに十月の十七日とぞ聞えし。

當日午前八時より第一回、第二回を順次開戦ありしが、月を越えて十一回の大奮戦は遂に十二月中旬を以てその終結を見るに至りぬ、茲に吾人は名譽ある勝利者が姓名を掲げて、光榮あるその額に花冠を添へんとす

得點	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回
勝利	赤軍	白軍	白軍	白軍	白軍
P	小林敏	小室	大日方	木村文	中野
C	川尻	若森	村林	横山	桑原
S	上田良	竹腰	寺本	竹内	澁谷
IB	千田	三浦	上坂	上田	中嶋
2B	山田宇	岡野	澤村	桑原	若林
3B	廣崎浩	蓮	賀來	岩崎	吉田
					村林

が遂に撰手の勝に歸しぬ。また、第二回は撰手副撰手混合競技あり。共に其戦争激甚にして今回の花形にぞありける。終りて臨んで、同運會の順序よく運びしは一に陸上運動部理事諸君の勞多きによる。茲に併記して謝意を表す。

◎應募當選披露

(特) 攻撃 四年級 野村佐一郎
湖のほとり 同 橋本久一
雨の夕ぐれ 同 中川 醇
田舎の舊跡と絶景 同 金谷 謙一
螢狩 二年級 野間莊三郎

◎愛軒文稿 永く本校に教鞭をたられし愛軒服部先生は本夏、去つて東都に行かる。

先生行かる、何の日か再び相會して、親しき童陶に接するを得べきぞ、有り、大に有り、これ諸子が今後の希ふところを充たすに足れり、

L.F.C.F.R.F		L.F.C.F.R.F	
勝利	得點	勝利	得點
白軍	20.13	白軍	20.13
赤軍	9.1	赤軍	9.1
廣部	高橋	廣部	高橋
平野	川尻	平野	川尻
澤村	東野	澤村	東野
大日方	速水	大日方	速水
石田	山田	石田	山田
高橋	木村喜	高橋	木村喜
千田	竹原	千田	竹原
白井	松井太	白井	松井太
竹内	千田	竹内	千田
但し第十回は撰手(赤)對副撰手(白)の競技にし		但し第十回は撰手(赤)對副撰手(白)の競技にし	
23.4(三回返アタリ)の割合) 2.4(六回返の平均		23.4(三回返アタリ)の割合) 2.4(六回返の平均	
1の割合) 3.5(九回返の平均)ありし		1の割合) 3.5(九回返の平均)ありし	

他あし、愛軒文稿即ちこれあり、諸子よ、これ先生が平日の抱懷あり、精神あり、又先生が斯學の作あり、乞ふ一書を左右に具へよ、先生を思ふの士、先生に接せんこと希ふものよ。

會 告

◎崇廣會役員姓名

會長	西村謙三
副會長	草場季彦
部長	小川廉三郎
副部長	松浦孝本
同	伊藤榮三郎
同	松浦益雄
同	澤村專太郎
同	野村義雄
同	木村二郎
同	賀木俊一

演説討論部

部長

理事

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

平川常太

廣崎浩一

廣瀨淵龍

華房季磨

平瀬作五郎

水野透

福永作十郎

池田衛

高橋茂十郎

田邊隆吉

川邊七太郎

珠玖退三

速水與之助

木村喜二郎

會 告

劍道部理事

同

同

柔道部理事

同

同

水上運動部

部長

副部長

同

理事

同

同

同

同

◎新入特別會員姓名

西村謙三
草場季彦
小川廉三郎
平川常太
坂藤榮三郎
伊藤榮三郎
松浦益雄

◎新入通常會員姓名

福井縣福井市寶永上町
滋賀縣犬上郡久徳村大字一圓
同 伊香郡余吾村大字下余吾
同 犬上郡彦根町字芹橋
同 彦根町大字石ヶ崎
同 同 東淺井郡虎姫村大字酢
同 同 東淺井郡大郷村字野寺
同 犬上郡彦根町字本町
同 東淺井郡虎姫村大字三川
同 犬上郡彦根町字芹橋十一丁目
同 東淺井郡田根村大字高畑
同 愛知郡押立村大字北花澤
同 犬上郡東甲良村大字長寺
同 犬上郡彦根町字川原町
同 同 河瀬大字堀
滋賀縣東淺井郡竹生村大字安養寺
同 伊香郡木之本村大字千田

水野二透
堀房次郎
佐藤春吉
福永作十郎
樋口達造
大川利吉
田中哲之助
南部環
野村佐一郎
橋本久一
關武雄
青山茂幹
村上義一
横田慎治
折笠晴一郎
雨森猶運
北野憲造
村居良真
西澤鉄治郎
北川八郎兵衛
北村治郎
種村信一
野阪正治
富永孟

會 告

愛知縣知多郡大字大谷村濱條
滋賀縣阪田郡長濱町大字八幡
同 東淺井郡竹生村大字安養寺
同 神崎郡南五ヶ莊村大字川並
同 阪田郡醒ヶ井村
同 蒲生郡中野村大字中野
同 犬上郡曹郷村大字四十九院
同 犬上郡彦根大字中組
同 岐阜縣稲葉郡力縣村大字岩利
滋賀縣犬上郡大瀧村大字川相
同 犬上郡彦根町大字平田
同 伊香郡丹生村大字上丹生
同 東淺井郡小谷村
同 犬上郡彦根町芹橋十丁目
大阪府泉南郡樽井村
滋賀縣神崎郡北五ヶ莊村大字宮莊
同 岡山上村大字相谷
同 犬上郡彦根町大字外馬場
同 同 大瀧村大字富之尾
同 同 彦根町大字芹橋十丁目
同 同 彦根町
同 同 彦根町大字芹橋三丁目
東京府東京市牛込區市ヶ谷富久町
滋賀縣東淺井郡下草野村字飯山
同 蒲生郡北比都佐村大字内池

澤田退三
杉本止男
蓮井靜
外村富造
細江忠治
小島彌太郎
古川義之
山本於外也
豊吉隆之進
上池林彌
中村勇治郎
加茂源一郎
脇阪喬三
近藤兵太
小早川雄
青木正一
寺田初太郎
天野捨造
坂上治助
後藤外馬
宮村久藏
木村誠一
山田常
清水武左
岡崎守藏

同 阪田郡鳥居本村大字鳥居本
同 愛知郡東押立村大字中里
同 阪田郡六藏村大字永久寺
同 犬上郡彦根町大字芹橋五丁目
同 滋賀縣犬上郡彦根町大字安養寺
同 同 彦根町四十九町
同 愛知郡角井村大字大覺寺
同 神崎郡南五ヶ莊村大字川並
同 犬上郡彦根町大字中組
同 東淺井郡小谷村字丁野
同 伊香郡七郷村字唐川
同 愛知郡日枝村大字高野瀬
同 神崎郡八幡村大字鉢光寺
同 愛知郡八木藏村大字蚊野
同 犬上郡彦根町大字川原町
同 阪田郡大原村大字堀市場
同 犬上郡彦根町字江戸町
同 長野縣伊奈郡喬木村
滋賀縣犬上郡彦根町字橋本町
同 伊香郡木之本村字木之本
同 滋賀縣阪田郡伊吹村大字上野
同 同 長濱町大字永保
同 犬上郡青波村大字古澤
同 愛知郡秦川村大字北蚊野

有川又三
岡村常吉
井上良藏
原清成
宮本與
小山定雄
早崎甚五郎
丸山房太郎
櫻井彦太郎
中村他家治郎
八田竹藏
布施孝之助
青山重次
那須野一乘
高橋源治郎
近藤孝太郎
堀田四郎
前田信三郎
原商一
西村正廣
岩根兵吉
高橋森次
川村善太郎
北川衆藏
北村嘉一郎

會 告

三十五年度即第十七學年新入學者生徒ヨリ
一人ニ付金壹圓宛ヲ入會金トシテ徵集スル
ニ對シ現在生徒ヨリモ一人ニ付金參拾錢ヅ
、ヲ附加徵收シ本會ニ於テ將來多額ノ費ヲ
要スル時ノ備ニ充テ特別會計トシテ永久ニ
蓄積スルノ議ヲ第二回父兄懇談會ニ於テ承
諾ヲ經タレバ本年三月現在生徒四百三人分
即チ百貳拾圓九拾錢ノ内百貳拾圓ヲ徵收シ
タルモノニシテ別途準備金百圓ト合シ銀行
ニ預入セリ但三十五年度ニ於テ決算スルノ
見込

◎寄 贈 雜 誌

矯々會雜誌	第七九號	福岡縣立中學明善校矯々會
海々會雜誌	第一號	日比谷中學校海城學校學友會
遊方會雜誌	第十一號	新潟縣立新潟中學校內遊方會
學友會雜誌	第七號	鳥取縣第一中學校學友會
近江商會誌	第四十四號	近江商會
北斗	第一號	札幌中學校學友會
會報	第三號	大津學校同窓會
龍南會雜誌	第四十九號	第五高等學校龍南會

◎投稿規則

- 一、投稿ハ學術ノ範圍ニ於テシ決シテ政治的時事論ニ涉ル可カラズ
- 一、投稿ハ本會所定ノ用紙ニ楷書ニテ認メ平假名ヲ用フベシ
- 一、投稿ニハ各自句讀ヲ施スベシサレド圈点ハ一切施スコトヲ禁ズ
- 一、投稿等其ノ篇ヲ異ニスル毎ニ其ノ用紙ヲ改メ題ノ下ニ級組及ビ姓名ヲ明記スベシ
- 一、投稿ハ其ノ長短ヲ問ハズ全篇完備セルモノタル可シ
- 一、投稿ハ其掲否ニ關ラズスベテ之ヲ反戻セズ
- 一、投稿ノ締切期限ハ其都度之ヲ定メテ一般ニ通知スルモノトス

金龜會報	第一號	第三佛教中學金龜會
校友會々報	第一號	滋賀縣農學校校友會
會友會報	第十八號	山口高等學校學友會
保惠會雜誌	第七十八號	愛媛縣立松山中學校保惠會
慶城文庫	第十二號	大垣中學々生會
親友會雜誌	第二號	柏崎中學親友會
會誌	第四號	大阪府立八尾中學校友會
校友會雜誌	第一百十八號	三重縣立第一中學校校友會
校友會雜誌	第十七號	第一高等學校々友會
學友會報	第一號	山口高等學校々友會
奉公	第一號	滋賀縣師範學校奉公團



滋賀縣立第一中學校

大日本

帝國

江洲大上郡

福満村

明治廿七年五月卅日內務省許可
明治三十五年十二月十九日印刷
明治三十五年十二月廿五日發行
滋賀縣犬上郡彦根町大字中組東
第二十三番屋敷
編輯兼發行人 木川 雅太郎
印刷人 安田 豊八
發行所 滋賀縣立第一中學校
印刷所 安田印刷工場
發行所 滋賀縣立第一中學校

亞細亞洲
之東部大
平洋之西
北部位